

本人のいないところで本人のことを話さない ーオープンダイアログに学ぶ生き方とはー

森川 すいめい

世界の医療団 理事 / 東京プロジェクト・東日本支援プロジェクト代表医師

要旨

1960年代、フィンランドの精神医療の中で「Need-Adapted Treatment」といった考え方が生まれた。精神病院での病状が切迫したような急性期の初回面接時、それまでは、本人抜きで入院や治療方針が決まっていたが、アラネンらはその意思決定の場に本人とその家族を招き対話（ダイアログ）した。ただこれだけで入院の必要性が4割に減った。この考え方は1981年に国家プロジェクトとなった。その影響を受けるようにして、1984年にオープンダイアログが誕生した。

オープンダイアログは、フィンランドの西ラップランド地方ケロプダス病院を中心に1980年代から開発と実践が続けられてきた精神医療やケアシステム全体を総称したものである。

「本人のいないところで本人のことを話さない」「対話主義」「即時支援」「リフレクティング」「病はひととひとの間に起る」「ネットワークミーティング」「Need-Adapted Treatment」「treatmentの場面では1対1にならない」「自分を大切にすること」などといった考え方が、クライアントやそのご家族のニーズに徹底して寄り添いダイアログを続けることによって大切にされていった。

この実践が驚くべき成果を上げ国際的に注目されている。例えば国の調査では治療を受けた人の約8割が就労か就学した（対照群では約3割）。

オープンダイアログは、サービス供給システム、対話実践、世界観などのいくつかの側面からとらえることができる。この西ラップランドで開発されたオープンダイアログを日本のそれぞれの現場で実践するにはどうしたらいいのか。今回はそのヒントに迫るためにダイアログの場をつくる。

作業科学研究, 12, 92-97, 2018.

